

大学経営政策研究

第15号 (2025年3月発行) : 91-107

学生参画型教育改善活動における一般学生の参画 —学生参画型FDを事例として—

中 里 祐 紀

学生参画型教育改善活動における一般学生の参画

—学生参画型FDを事例として—

中里 祐紀*

1. はじめに

2000年に文部省高等教育局から『大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して—』（以降、廣中レポートと表記する）が出されて以降、学生中心の教育への転換が繰返し指摘される中で、各大学は様々な形で学生の意見を大学の教育や運営に活かそうとしている。大学が学生の意見を汲上げる方法は様々であるが、一部の大学では大学が学生を教育改善活動に参画させる取組みが行われている。大学の教育改善活動に学生を参画させる取組みは、廣中レポート以前から確認できるが、2000年代後半に「学生FD」という取組みが始まって以降、教育改善に学生の視点を活かす動きは急速に拡大していった。これらの取組みは、日本の学生参画について取上げる際にも繰返し参照されてきた（沖 2016；田中 2018；2023；武 2024など）。

2010年代までの学生参画型FDは、服部（2012）が指摘する「FDや教育改善を推進しようとする教職員と、それに共感する核となる学生たち」の活動という性格が強かったが、近年の学生参画は、全学レベルでより組織的に取組まれるようになってきている。例えば、「令和5年度 私立大学等改革総合支援事業」の調査票では「大学等の教育研究活動への学生の参画を促す仕組み」が取上げられ、「学生が大学等の意思決定に参画する機会」の有無が問われている。認証評価では、2022年度から日本高等教育評価機構、2023年度から大学基準協会が質保証への学生参画に関する研究が行われており（日本高等教育評価機構 2024；大学基準協会 2024）、今後認証評価で学生参画が取上げられる可能性がある。

これまでの日本の大学教育における学生参画の変遷を踏まえると（中里 2024）、参画する学生を確保することは容易ではなく、実践上の課題として指摘されてきた（服部 2012）。一方、前田（2015）が2大学の学生計749人に対して学生がFDに参画することについて意識調査を行った結果において、多くの学生が活動の重要性を認識していることが明らかになっている。この点を踏まえると、主体的に参画しないが学生参画の意義を認める学生は多数存在することが読取れる。彼らが無理なく参画できる組織を整備することは、参画学生の確保に止まらず、学生参画型組織の包摂性を高め、組織を持続的なものとするにつながる。

そこで本稿では、比較的研究が蓄積されている学生参画型FDを対象として、一般学生の参画実態を明らかにする。なお、本稿では学生参画型FDの定義について「FDの推進にあたり学生の視点を活かすことを目的として設置された組織において、学生と教職員が相互の立場を尊重しつつ行う教育改善活動」（中里 2022）を採用する¹。

* 東京大学大学院教育学研究科 博士課程

2. 先行研究

学生参画において参画学生の多様性や包摂性を高めることの重要性については、既に海外で議論が行われている。Matthews (2017) は、メンバーの多様性と包摂性を考慮しない場合、似たような学生とスタッフによる活動になるリスクを指摘している。Bindra et al., (2018) は、学生パートナーの選抜要件にGPA等が含まれるケースの存在を指摘し、そこに苦勞している学生や疎外されている学生は含まれるだろうかと問題提起を行っている。

日本でも「初めから関心が強い一部の学生がサークル的に取り組んだのでは長続きしないし、大学全体への広がりも弱い」(岡山大学 2009)、優秀な学生の参画だけを前提として学生参画型組織を設計した場合、参画学生の提案が一般学生の認識と遊離するおそれがある(橋本 2015)との指摘は以前から存在した。しかし、研究者や実践者の間で広がりを持った認識であったとは言い難い。例えば、木野 (2012) が岡山大学の学生参画型FD組織を念頭に置きつつ指摘した「(学生) スタッフの意欲に個人差が大きい」「公募による学生の方が選抜による学生よりも意識が高いことは明らかである」という主張、田中 (2022) が取上げた「真面目に勉学に励んできた成績優秀な学生の意見は傾聴に値するので、教育面で改善すべき点を素直に指摘してほしい」という発言の背後には、参画学生に対して「大学教育の改善に対する強い関心を持っている」「成績が優秀である」「他の学生の模範となる」などの特性を持つことが想定されている。沖 (2013) の「大学や教職員が、学生視線での調査研究を依頼し、その報告を実際の改革に活かしていきたいと考えるくらいの専門性が必要」との主張もある。

確かに海外の先進事例を踏まえると、このような特性を持つ学生が学生代表として大学のガバナンスに参画することは、うまく機能すれば学生代表個人の意見に止まらない多様な学生の声を大学側が把握し、教育や運営に活かすことが期待できる。しかし、この方式については、学生参画を担う学生は学生全体を代表しているのかという観点から妥当性について議論が行われていることも報告されている(渡邊 2024)。日本の質保証への学生参画についても、荒木 (2024) が、インタビュー結果を踏まえ、「学生の多様性の確保が大きな課題である」と指摘していることを踏まえると、日本においても多様な学生の参画可能性について検討することは意義があると言える。

この議論で重要なのは有志の学生以外を含む多様な学生が参画する意義や効果に関する検証である。だが、参画学生の成長について扱った先行研究は存在するものの(安田・近田 2009; 吉田 2013; 奥田・榊原・恒安 2022など)、有志の学生以外の学生に焦点を当てた研究は前田 (2015) を除き見当たらず、専ら実践者の印象に基づいて議論が展開されてきた点が研究上の課題である。前田 (2015) は、FDへの学生参画の効果について「その活動に直接携わる学生だけではなく、活動に積極的に参加しない大多数の学生にとっても妥当なものでなくてはならない」と指摘し、調査対象を「取り組みに参加している学生か否かを問わず、広く「一般の」学生」に設定し、効果検証を行っている。この研究は、参画学生以外の多くの学生が活動の重要性を認識していることを量的分析により明らかにしたという意義を有するが、学生の意識を明らかにすることが目的であったため、そうした学生が実際に参画した場合の実態については把握が行われていない。そこで本稿では

学生参画型FD組織に参画する学生について、有志の学生だけではなく、一般学生の存在に着目し、彼らが参画することで生じる影響について明らかにする。

3. 研究手法

3.1 事例大学

一般学生を含む多様な参画学生の実態を把握するという本稿の目的に照らすと、事例大学は有志の学生と一般学生両方の学生が参画する学生参画型組織である必要がある。この点を踏まえ、本稿では岡山大学の学生参画型FD組織（学生・教職員教育改善委員会）を事例とし²、そこに参画した経験を有する学生を対象とする。

この組織は、大学がFDを推進する組織の一環として、学生の意見を反映させることを目的として2001年に設置した公的な委員会である。会則³によると、委員会は「各学部から推薦された学生委員 各2名」「委員会から推薦された学生委員 若干名」「各学部から推薦された教員委員 各1名」「教育開発センター専任教員及びFD専門委員会委員から推薦された教員委員 若干名」「事務職員 若干名」「その他、委員会が必要と認めた者 若干名」で組織される。岡山大学（2009）所収の委員名簿（2005年度～2008年度）によると、学生委員は36～38人、教員委員は15～17人、職員委員は2～3人、合計委員数は53～57人で推移している。委員長は学生委員の中から選出される。学生委員に報酬は支給されていない。

委員会は原則月1回、各委員が所属するWGは週1回程度開催される。中里（2022）の整理によると、活動期間を通して「授業改善」「システム改善」「学生交流」を中心に、様々な企画提案が行われていた。また、学生発案型の提案だけではなく、大学からの依頼に基づく検討や全学的にFDを推進する組織と協働した取組みも行われていた。2005年度には特色GPに採択されるなど、他大学の取組みにも影響を与えたが、2020年に活動終了となっている。この組織の学生委員は学部からの推薦に基づき選出されていたが、推薦方式は各学部に一任されており、学生委員として活動を希望する者が立候補することもあれば、希望者がおらずくじ引きで選出されるケースもあった。そのため、参画する学生の意欲は多様であり、有志の学生以外の一般学生も毎年参画していた⁴。この事例については、岡山大学（2009）に多くの一次資料が所収され、実践者による事例報告や事例研究が行われている（橋本 2002a；橋本 2002b；天野 2012；和賀 2014；中里 2022など）。参画学生の特性については、くじで選ばれた学生が卒業まで積極的に活動した事例が指摘されているが（橋本 2015）、彼らの参画実態については十分明らかになっていないため、更なる研究が必要である。

3.2 本論文における学生の類型とインタビューの選定

インタビューは、岡山大学の学生参画型FD組織で過去に活動経験を有する卒業生又は在学生とし、半構造化インタビューを実施した。分析の枠組みは、林（1994；2002；2015）の参画理論の枠組みを援用した。林（2015）は参加の姿勢を、①その場にたまたまいるだけの「参集」（第1段階）、②一部能動的な参加姿勢を示す「参与」（第2段階）、③自ら企画・実施・評価・伝承に直接参加する「参画」（第3段階）の3段階で整理し、参加活動が深化する過程を明らかにしている。

表1 本論文における学生の類型

A (積極型) 大学教育の改善に関心を持つ学生
B (中間型) 大学教育の改善にある程度関心を持つが、学生生活の中での優先順位はそれほど高くない学生
C (消極型) 大学教育の改善にほとんど関心を持っておらず、主体的に活動したいとは考えていない学生
D (無関心型) 大学教育の改善に関心を持っておらず、参画しない学生

表2 本論文で使用する用語が示す学生の範囲

①学生全体…A・B・C・Dタイプ
②有志の学生…Aタイプ
③有志の学生以外…B・C・Dタイプ
④一般学生…B・Cタイプ

また、各段階に進むためには参加行動の質的転換（飛躍）が必要であると、飛躍の達成の重要性を指摘している。この理論は岡山大学の学生参画型FDの実践者にも影響を与えたことが確認でき（橋本 2006）、本分析と親和性の高い理論である。各段階の名称は分析対象の実態を踏まえて表1のようにA（積極型）、B（中間型）、C（消極型）とした。また、本研究では分析の対象外であるが、「大学教育の改善に関心を持っておらず、参画しない学生」が存在することを踏まえ、D（無関心型）を設定した。また、本論文では、学生に関する用語として、①学生全体、②有志の学生、③有志の学生以外、④一般学生を使用しているが、①～④の用語が示す学生の範囲は、表2のとおりとする。

インタビューには活動開始時期と2年後の任期満了時の両方の時点で最も近いタイプについて聞き、現状維持も含め全ての成長パターンが揃うまでスノーボールサンプリングによりインタビューの数を増やし、多様な学生の成長パターンが確認できるよう配慮した⁵。インタビュー15人の属性は表3のとおりである。A～Cタイプの学生の属性判断に当たっては、インタビューに各タイプの定義について詳しく説明した。そのタイプを選択した理由も詳細に確認したことから、インタビュー間の判断基準の差は最小限に抑えられていると判断する。学部の多様性にも配慮した。発言を引用する際、発言者については、特に必要がある場合のみ記載し「a氏」「b氏」のように表記する。発言の引用に当たっては、事前にインタビューに内容について確認している。

卒業生にインタビューを行う場合、小方（2003）が、大学の教育効果を測定する時期を卒業後とした場合、「実際の経験から時期が遠ざかることにより、例えば美化など評価にバイアスがかかる可能性も否定できない」と指摘している点に留意する必要がある。この点を踏まえ、本インタビューでは発言内容について当時の会議資料等の一次資料との突合を行うことで、実態の正確な把握に努めることとした。そのため、インタビューは収集した一次資料との突合が可能な期間に活動した者とし、2008年から2019年までに活動経験がある者を対象とした。一次資料は、岡山大学（2009）所収の資料及び、「独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律」に基づき法人文書の開示請求を行い、開示された会議資料を使用した。主な質問項目は、①学生参画型FD 活動を行うことになった経緯、②任期中の活動、③多様な学生との協力、④活動を通じた成長、⑤岡山大学の学生参画型FD組織についてである。質問事項は事前に送付し、オンライン会議システム（Zoom）を利用して1人当たり90分～120分実施した。インタビューの実施に当たっては、あらか

表3 インタビュー어의属性

	学部等	活動年度	開始時期 タイプ	任期満了時 タイプ
a	理	2010年度～2013年度	A	A
b	医	2016年度～2019年度	A	A
c	経済	2017年度～2019年度	A	A
d	経済	2018年度～2019年度	A	A
e	経済	2010年度～2013年度	B	A
f	農	2015年度～2018年度	B	A
g	歯	2017年度～2019年度	B	A
h	薬	2008年度～2009年度	B	B
i	MP※1	2010年度～2013年度	B	B
j	教育	2019年度※2	B	B
k	理	2008年度～2011年度	C	A
l	教育	2019年度※2	C	A
m	法	2008年度～2009年度	C	B
n	文	2011年度～2014年度	C	B
o	理	2017年度～2019年度	C	C

※1 マッチングプログラムコース

※2 2019年度をもって廃止されたため、活動期間は1年

じめ東京大学倫理審査専門委員会の研究倫理審査を受け、承認を得た。

3.3 問いの設定

学生参画の意義や効果について検証する場合、「大学側、学生側の双方が学生参画の意義をどう主体的に認識するか」(福留 2024) という視点は、本稿の分析でも重要となる。本稿の主題に照らせば、具体的には、一般学生を含む多様な学生が参画することで、大学側と学生(有志の学生と一般学生の両方)がその効果を実感できるのかという点を検証する必要がある。したがって、本稿で検討する問いは次の(1)(2)となる。

(1) 学生参画型FD活動に一般学生を含めることで期待できる効果は何か。

岡山大学の学生参画型FD組織が行う提案は、参画する学生には大学という場の構成員としての責任が求められ、学生の提案は精緻化されたものであることが求められていた(中里 2022)。この点を踏まえ、参画した一般学生の意見が実際の提案にどのような影響を与えていたのかを確認する。また、提案以外の活動や組織の運営に与えた影響についても確認する。その結果を踏まえ、学生参画型FD組織の活動に一般学生が参画することで期待できる効果について考察する。

(2) 学生参画型FD活動に一般学生を含めることは、有志の学生と一般学生双方の成長につながるか。

一般学生の参画は、これまで想定されることの少なかった学生に参画の道を拓くことにつながるが、参画により有志の学生の負担が過重となり彼らの成長が妨げられるとすれば、より慎重な対処が必要となる。したがって一般学生の参画は、学生の成長の観点から有志の学生と一般学生双方にとってプラスの影響を与えるかについて検討が必要である。この問いの検討に当たっては、有志の

学生と一般学生の活動期間全体を俯瞰しつつ成長過程を明らかにした上で、双方に与えた影響を考察する。

上記(1)(2)の問いについて検討した後、その結果を踏まえて一般学生を含む多様な学生が参画する効果と意義について考察する。

4. 分析

(1) 学生参画型FD活動に一般学生を含めることで期待できる効果は何か。

本節では、学生参画型FD活動に一般学生が参画した場合に期待される効果について検討する。この点については、インタビュー全員に対する共通質問「A～Cタイプの学生が混在することで良かった点、悪かった点があれば教えてください」の回答結果をもとに実態を確認する。当該質問におけるインタビューの回答は、①「良かった点」「悪かった点」を端的に述べた後、②その根拠となるエピソードを語る形となっている。

本分析は、まず①について、回答内容を個別の意味内容を持つまとまりに分割し、コード化する作業を15人分を行った。次に、②の語りの中に①に含まれないコードが存在する可能性を考え、②の発言を対象とし、同様のコード化を行った。両作業を経て最終的に残ったコードは「良い点」「悪い点」を合わせて1人当たり最大3つであった。次にインタビュー間のコードの重複状況を確認し、(1)A～Cの全タイプに共通(2)A～Cの複数タイプに共通(3)A～C単独のタイプ内でのみ共通(タイプ間の共通性なし)(4)共通性なし(1人のインタビューのみが該当するコード)のいずれかに整理した。例えばBタイプ学生の場合、「良かった点」として「意欲が低い人がいるという現状を間近で知ること、どうしたらこうした活動が学生全体に興味を持ってもらえるかを考える機会になっていた」「単純にいろんな人がいて、同じ活動をしていても、こんなにモチベーションの違いがあるのだという気づきがあった」「(離脱する学生について)なぜ途中で来なくなるのか、参加したくなくなるのだろうかと考える機会があった」等の発言が確認された。これらを「意識の違いを認識」という共通コードにまとめた。「意識の違いを認識」という共通コードはAタイプとCタイプの学生には確認できなかったため、このコードは「(3)A～C単独のタイプ内でのみ共通」に該当する。このような整理を行った結果、最終的に残った「良かった点」に関するコードは、(1)1つ(2)該当なし(3)Aタイプ1つ、Bタイプ2つ、Cタイプ1つ(4)該当なし(根拠となるエピソードは多様だがコードレベルではいずれも(1)または(3)に集約された)であった。「悪い点」は、(1)が2つ、(2)～(4)は該当なしであった。以上を合計すると最終的に残ったコードは7つである。なお、客観性を担保する観点から一連の作業は全員分複数回実施した。以上を踏まえ、各タイプについて記述する際は最終的に残った7つのコード全てに言及し、コードの恣意的な取捨選択の可能性を排除する。その上で、具体的な説明が必要であると判断した箇所は、語りの内容を引用する。

まず、共通性としてA～Cタイプを問わず全員が指摘したのは「多様な学生の参画による広い視野の獲得」である。この組織は学生委員を各学部の責任の下で選出するため、全学部の1年・2年の学生代表が構成員に含まれる。多様な学生が参画し意見交換を行うことで、所属学部だけではなく大学全体の視野に立った提案を行うことが可能となっていた。

次に、各タイプ間の相違点について述べる。

Aタイプ学生は、「学生全体との認識差の確認」を挙げている。Aタイプの学生は、自身の大学教育や教育改善に対する関心の高さは一般的な学生の認識とは異なることを自覚しており、「多様な学生と日常的に議論を行うことが価値観の擦り合わせにつながった」「自らの活動や提案の妥当性を日常的に再確認する場となっていた」と指摘している。また、「成績の良い学生だけでなく、異なる学習意欲を持つ学生の視点も考慮することで、バランスの取れた施策が考案できる」との指摘もあり、多様な学生が参画することは、Aタイプの学生自身が望ましいと考える提案が学生全体を俯瞰した内容となっているか再確認する機会を日常的に提供したと評価できる。

Bタイプ学生は、「公募では参画しない学生の存在」「意識の違いを認識」を挙げている。前者は、「不本意ながら参画し、活動してみたら楽しかった」という学生が一定数存在していたことが指摘され、学生委員の選出システムを評価している。後者は、先述のとおり「意欲が低い人がいるという現状を間近で知ること、どうしたらこうした活動が学生全体に興味を持ってもらえるかを考える機会になっていた」と指摘している。多様な学生の参画を可能とするシステムは、公募制では参画しなかった多くのBタイプの学生にとって、自身が学生参画型FD活動を行う機会を提供したものと評価できる。また、Aタイプ学生及びCタイプの学生と接することで、学生全体を俯瞰した視点を獲得することにつながっていた。

Cタイプ学生は「無理のない範囲で活動を継続できた」点を指摘している。具体的には「中心となって引張っていきたい人はリーダー、そこまでではない人は裏方といった役割分担ができていた」と指摘し、多様な参画姿勢が許容されていたことで活動を継続できたと述べている。実際、彼らの率直な意見が提案に影響を与えることも少なくなかった。A・Bタイプの学生からは、アンケートの設問検討時、新入生を対象とする履修相談会の実施に当たり作成した資料のチェック時、新しい広報戦略の検討時に彼らの意見が役立ったことが指摘されている。Cタイプの学生は、Bタイプ以上に活動に参画することが通常想定されない学生であるが、多様な学生が無理のない範囲で参画できる環境が確保されたことで、活動に関心がない学生が参画して活動するという状況を生み出すことが可能となったと評価できる。また、表3で確認したとおり、Cタイプの学生の中にも活動をとおして積極的な役割を担い、Aタイプの学生となり組織運営の中心的な役割を担うケースも存在していた。

以上を踏まえると、出身学部や学年の多様性に加えて有志の学生以外の学生が無理なく参画可能な制度設計を行うことで、参画学生が自身と組織内外の学生の認識との遊離可能性を日常的に確認する機会を提供し、提案を実現可能なものへと精緻化する上で役立ったと評価できる。また、多様な学生と交流することは、組織の活性化を超えて自身の卒業後の進路選択に影響を与えたことを複数人が指摘している。1氏は「活動を通して〇氏とつながりができ、影響を受けて大学院で生物学を学ぶことにした」と述べている。1氏は教育学部から理学系の大学院に進学しており、学部とは異なる分野を研究する選択をしていることを踏まえると、その影響力の大きさが窺える。g氏は歯学部であるが、「この組織がなかったら、今後のキャリアが全く変わっていたと思う。大学に残って大学教員として、教育の経験をしていきたいと思っている」と述べている。本稿で実施したイン

タビュー以外でも、これまで学生参画型FD活動経験を有する者が、大学院に進学して高等教育に関する研究を行っている事例、大学職員として就職した事例、他大学では教員として質保証や学生参画の実務を担っている事例も存在する。

ただし、多様な学生が参画する意義を認めつつも、一部の者から課題が指摘された。「悪い点」として指摘されたのは、「全く活動しない学生の存在」「意見の集約に時間を要すること」の2点である。実際、学生参画型FD組織が選出後一度も活動に参加しない学生委員に対応する手段は限られていた。また、多様な意見を尊重する意義を認識しつつも、具体的な提案にまとめる段階で意見の集約に苦勞した経験も語られた。このような状況が生じるのは、B・Cタイプの学生は、「Aタイプの学生がいなければ任期満了まで活動できなかった」と発言する者が多く、組織運営に積極的な役割を担うAタイプの学生の存在が前提となっている点が影響している。組織におけるA～Cタイプの学生の割合は年度によって異なるため、Aタイプの学生が少ない場合彼らの負担が過重となる可能性がある。負担軽減の観点からは、2年間の任期満了時に活動の意義を理解し、組織に残留して引続き活動を行う学生を一定数確保できるかがポイントとなる。そのためには、各タイプの学生の成長過程を把握し、適切な時期に適切な支援を行うことが重要となる。次節では、この点を検討する。

(2) 学生参画型FD活動に一般学生を含めることは、有志の学生と一般学生双方の成長につながるか。

本節では、学生参画型FD活動に参画した学生の成長過程を明らかにする。この点については、学生委員に選出されてから任期満了までを連続的に捉える必要がある。そのため、①インタビューの大学入学以前の経験について確認した上で、②全員に対する共通質問「どのような経緯で委員に選出されましたか」で選出の経緯を確認、③「1年次の主な活動内容について教えてください」で1年目、④「2年次の主な活動内容について教えてください」で2年目の活動実態を把握した。また、参画当初と任期満了時で異なるタイプを選択した者に対しては、タイプ選択理由に加えて「変化のきっかけとなった出来事があれば教えてください」という質問を行い、意識変化を生じさせる要因の詳細な把握に努めた。変化のきっかけとなった出来事については、該当者全員が1年次の出来事を挙げていることから、成長過程の把握の時系列は、(1)大学入学以前の経験 (2)学生委員

時期 タイプ	大学入学以前の 経験	委員選出の経緯	参画当初の 活動姿勢	任期中の 意識変化	任期満了時
A (積極型)	教育に対する関心 (生徒会活動など)	大学教育への関心に基づく 立候補	当初から主体的に活動	多様な学生が参画する 重要性を認識	任期満了後の 活動継続の判断
B (中間型)	教育に対する関心 (生徒会活動など) ※一部の学生のみ	活動への関心に基づく 立候補	他の活動とのバランスを 図りつつ活動	活動姿勢が変化する契機 (飛躍の経験)	
C (消極型)	特段のエピソードなし	引受けざるを得ない状況と なったことによる 消極的立候補	責任感・義務感による活動	活動姿勢が変化する契機 (飛躍の経験)	

図1 類型別にみた参画学生の成長過程の概要

選出時 (3)1年次の活動 (4)任期中の意識変化 (5)2年次の活動 (6)任期満了となる。次に、15人全員について該当する設問への回答内容を前節と同様の方法で共通のコードをまとめる作業を行った。その後、結果を踏まえ、学生委員選出時から任期満了までの活動実態を整理するため、KJ法を用いて図解を行った。15人について同様の作業を行った後、A～Cの各タイプのインタビューの図解を比較検討し、共通点と相違点の有無を確認した。各タイプ内の図解はコードレベルでは共通性が高いものであった。この点を踏まえ、各タイプの基本的な成長過程を整理したのが図1である。客観性を担保する観点から、一連の作業は前節同様全員分を複数回実施した。

一方、参画学生の経験や意識変化が生じた経緯などについては、インタビューによって多様であった。この点を踏まえ、各タイプの成長過程について詳述する。本節においても最終的に残ったコードに言及し、その上で、具体的な説明が必要であると判断した箇所については、実際の語りを引用する。

Aタイプ学生は、当初から大学教育や教育改善に関心を持ち、学生参画型FD活動を開始している。4人中3人が中等教育段階での生徒会活動経験を有し、学校運営に学生が参画することの重要性を認識していた。残り1人は大学入学前のアクティブ・ラーニング経験を挙げて大学入学後に受けた授業とのギャップに問題意識を感じたと述べている。Aタイプの学生は、活動期間を通して高いモチベーションを維持する傾向にある。思いどおりにならないことが生じた場合も、それを理由にモチベーションが低下するのではなく主体的に解決策を模索しつつ活動している。彼らは組織のリーダー的存在として組織運営にも積極的に関わっているが、自身の活動姿勢をスタンダードとは考えず、多様な学生（特にB・Cタイプ）の希望を踏まえ、無理のない形で参画する環境を確保した上で、組織内で不足している役割を自らが積極的に補完しようとする姿も確認できる。この点についてc氏は「先輩たちの意見や指摘を受けて気落ちしている学生がいればそこに寄添う役割を心がけた」「議論がヒートアップし過ぎた際には、冗談など言いながら冷静な議論に戻す役割も担った」と述べている。このエピソードで重要なのは、彼らが必ずしも自身が最も得意な役割を担っているわけではないという点である。c氏は高校時代に生徒会長経験もあり、「引っ張っていくことは嫌いではなかった」が、「現状引っ張っている人がいる中で、そこをわざわざ奪いに行こうとは思わない」と述べ、「自分が演じようとしていた私は、不出来な先輩だった」と振り返っている。参画している他の学生の個性を尊重した上で、組織内で担い手がいない役割を演じるエピソードは、c氏以外の年度に活動した複数のインタビューからも指摘された。これらは林（2015）が参画の特徴として指摘した「場づくり」の考え方にも通じる性質のものと評価できる。任期満了時にAタイプを選択した7人全員（組織廃止で残留の選択肢がなかったd氏と1氏を除く）が任期満了以降も活動を継続しており、学生参画型FD活動の意義や重要性を理解し、任期満了後も活動を継続していることが読取れる。

Bタイプ学生の参画動機は、Aタイプの学生のような大学教育や教育改善に対する具体的な関心が語られることは少なく、学生生活の中で何か活動を行ってみたいなどの漠然とした思いから参画することを決めた学生が過半数を占める。ただし、参画の判断に当たり先輩委員への情報収集や新入生歓迎イベントへの参加により「組織の雰囲気を見た上で参画することにした」と述べた者が2

人おり、参画前に具体的なアクションをとった者も存在する。Bタイプの学生は、共通して「活動への関心の低さ」「他に優先する活動の存在」「他の学生に遠慮する気持ち」の内の一つまたは複数を経験として挙げ、参画当初は積極的に活動できていなかったと述べている。中心学年となる2年次以降は積極的に活動するようになった者が多い。2年次の活動は、自ら企画を提案し実現に向けて活動するなど「主体的に参画」、場の雰囲気づくりや後輩のサポートなど「サポート役として参画」のいずれかに分類できる。Bタイプの学生はAタイプの学生のように会議で発言することは少なく目立たないケースもあるが、組織運営上「サポート役として参画」する学生も重要な存在であった点に留意する必要がある。特に、必ずしも当初から活動に関心を持っていない状態から活動の意義を見出し、活動を続けることにした経験は、B・Cタイプの学生に寄添うサポートにつながると考えられる。Bタイプの学生に意識変化が生じた理由は、「学生参画型FD活動の意義を認識」「学生参画型FD組織を自身の居場所として認識」のいずれかまたは両方であり、前者を挙げた者は全員が任期満了時はAタイプの学生であったと述べている。後者を挙げた者は、任期満了時のタイプとしてAまたはBタイプを選択しているが、共通して学生参画型FD組織が円滑に機能するよう自分なりの役割を果たそうとしていた。任期満了後残留しなかったケースもあり、組織廃止のため活動継続の選択肢がなかったj氏を除くと該当するのはh、m氏である。h氏は、3年次からは毎日実習があり活動継続は困難だと参画当初から認識していたと述べている。m氏は学生委員としては残留しなかったが、後に学生アルバイトとして組織運営を補助し、後輩のサポートを行うなど、卒業まで学生参画型FD組織とのつながりを有していた。

Cタイプの学生に共通しているのは「活動に関心がない」「仕方なく引受けた」という点である。選出過程では、各学部が学生委員を選出する場に意図せず居合わせたか、その場で誰も引受ける者がおらず、結果的に学生委員を引受けることになったという点も共通している。ただし、「誰も手を上げず、委員選出を担当する先生のことを少し不憫に思ったので仕方なく引受けた」「活動に関心があったわけではないが、いないと困るのだろうと思い仕方なく引受けた」などと述べるが、本人の意思に反して強制的に参画させられたケースは少なく、指名されたl氏を除く全員が不本意であったとしても最後は自分の意思で参画を決断している点に留意する必要がある。Cタイプの学生もBタイプの学生と同様に参画当初は積極的に活動しておらず、活動自体に関心を持っていない者が多い。そのような状態でも活動を継続することが出来た理由として、共通して次の3点のいずれかまたは複数が挙げられた。第一は、活動開始後、比較的早い段階で活動の意義に気づくケースである。k氏は、「活動開始時期に先輩学生の提案が形になる瞬間に立会い、この組織が提案したことが形になることが見えたことがその後の活動を行う上で重要なモチベーションとなった」と述べている。実際k氏は、任期満了時のタイプをAと評価し、卒業まで活動を続けている。第二は、不本意な形で選出されたとしても、学部代表として選ばれた「責任感」に基づき活動するケースである。「責任感で会議には出るようにした」「辞めると選出した先生に悪い」「(活動に関心はなかったが) いい加減にやってよい活動だとも思っていなかった」などの発言が確認されるが、概ね活動開始から半年経過後には活動についての語りに「責任感」「義務感」というワードは確認されなくなる。この第二のケースに該当した者は全員任期満了時のタイプとしてA又はBを選択している。第三

は、自分の出来る範囲で活動することに徹したケースである。授業や部活、アルバイトを通常どおり行い、それでも参加できる場合は参加するというスタンスであったが、このケースに該当する者は、このような参画姿勢でも許容される雰囲気組織にあったことを指摘しており、結果として同じようなスタンスで任期満了後も活動を継続している。Cタイプの学生は、参画当初は活動に関心を持っておらず、有志の学生で構成された組織では参画することのない学生である点を踏まえると、意識の変化という観点からは、最も大きな変化を遂げた学生とも評価できる。

これまで有志の学生と比較して目立たない一般学生の参画実態にはほとんど注目されず低い評価を与えられる傾向にあったが、以上の検討を踏まえると、一般学生が学生参画型組織の運営上重要な役割を果たしていることが明らかになった。

5. 結論

本稿は、岡山大学の学生参画型FD組織を事例として、学生参画型教育改善活動において有志の学生以外の一般学生が参画する意義と影響について検討した。得られた主要な知見は次のとおりである。

学生参画型FD活動に参画した一般学生の意見は、組織が行う学生の提案、履修相談会等のルーティン的な活動、広報戦略などの組織運営において有用な知見を提供している。学部や学年などの属性だけではなく、大学教育への関心や学びに対する姿勢などを含む多様な学生の意見が包摂されることで、参画学生が学生全体を俯瞰した視点を日常的に身につけることにつながり、そのことがより実現可能でバランスの取れた施策の提案につながる事が示された。また、有志の学生も一般学生も活動を通して成長している。有志の学生と一般学生では成長過程に違いがあるが、両者が混在することでお互いにはない視点を学び合い、その後のキャリア形成に影響を与えたケースも確認された。

以上の結果を踏まえると、学生参画型の教育改善活動において、参画する学生として一般学生を排除すべき積極的な理由は見当たらない。今後は、一般学生を含む多様な学生が学生参画にアクセスできる機会の確保について検討する必要がある。

本稿の限界としては次の3点がある。第一に、本稿の調査対象には活動から離脱した学生は含まれていない。活動を離脱した学生本人へのヒアリングは困難であるが、活動を離脱する学生を見てきた教職員や学生にヒアリングを行う等の方法により実態を把握する必要がある。第二に、本稿では一般学生の参画の効果や意義を明らかにすることを目的としたため、各タイプ内部の学生の多様性については十分言及できなかつた。参画学生の多様性については更なる実態把握と検証が必要である。第三に、本稿の分析は1大学の事例研究であるため、分析結果を他大学の学生参画型教育改善活動、更には大学運営への学生参画全体への適用可能性を検討するための事例研究の蓄積が必要である。今後の課題としたい。

付記

本論文は、東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター若手研究者育成プロジェクト研究課題「大学の教育改善活動に参画する学生の多様性と包摂性—学生参画型 FD 組織を中心に—」の成果の一部である。

注

- 1 この定義は、木野（2015）の学生FDの定義である「授業や教育の改善に関心を持つ学生が、その改善のために学生自身が主体的に取り組む活動であり、大学側との連携を求めるもの」という定義よりも、大学における公的な位置付けを重視している（中里 2022）。
- 2 岡山大学の学生参画型FD組織は、活動期間中に当初の名称である「学生・教員FD検討会」から、「学生・教職員教育改善委員会」「学生・教職員教育改善専門委員会」「学生・教職員教育改善部会」と3度の名称変更が行われているが、いずれの名称の組織にも共通する内容を記述する場合は、学生参画型FD組織と表記する。
- 3 「岡山大学教育開発センター学生・教職員教育改善委員会会則」（岡山大学 2009所収）
- 4 中里（2013）が参画学生に対して実施したアンケートにおいて、立候補ではなく推薦で選出された学生16人全員が「推薦でなくとも委員会に入っていたか」という問いに対して「はい」と回答していない点を踏まえると、彼らは立候補を前提とする有志の学生のみで構成される組織には通常含まれない学生であると言える。
- 5 インタビュー어의選定に当たっては、活動途中でモチベーションが低下するケースも想定しており、成長を実感していない者を対象外とするなどの選別は一切行っていない。協力が得られた方全員に対して実施した。

参考文献

- 天野憲樹（2012）「学生・教職員教育改善専門委員会Sweet Food」木野茂編著『大学を変える、学生を変える』ナカニシヤ出版、105-126頁。
- 荒木俊博（2024）「日本の大学における学生参画の現状と質保証に資するための要素の検討—インタビュー調査及び全国大学調査から—」『淑徳大学高等教育研究開発センター年報』11、93-107頁。
- 小方直幸（2003）「学力形成とその測り方」有本章編著『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部、75-88頁。
- 岡山大学（2009）『平成17年度文部科学省大学改革推進事業特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）新機軸「学生参画」による教育改善システム最終報告書』。
- 沖裕貴（2013）「『学生参画型FD（学生FD活動）』の概念整理について—『学生FDスタッフ』を正しく理解するために—」『中部大学教育研究』13、9-19頁。
- 沖裕貴（2016）「日本の高等教育における「学生参画」の概念の再整理の試み—新たな「学生連携」

- の概念をどう捉えるか―』『中部大学教育研究』16, 1-12頁.
- 奥田宏志・榊原暢久・恒安眞佐 (2022) 「学生参画型FD活動SCOTプログラムに参加する学生の特徴」『高等教育開発』1, 11-18.
- 木野茂編著 (2012) 『大学を変える、学生が変わる』ナカニシヤ出版.
- 木野茂編著 (2015) 『学生、大学教育を問う』ナカニシヤ出版.
- 武寛子 (2024) 「スウェーデンの大学における学生の評価リテラシーとは何か―「学生の影響力」行使のために」『高等教育研究』27, 147-166頁.
- 大学基準協会 (2024) 『質保証における学生参画のあり方に関する調査研究報告書』.
- 田中正弘 (2018) 「日本の大学における学生参画：質保証への参画を中心として」『大学研究』45, 17-30頁.
- 田中正弘 (2022) 「プログラムレビューへの学生参画」『IDE現代の高等教育』643, 42-47頁.
- 田中正弘 (2023) 「内部質保証に参画する学生代表―イギリスの大学の学生組合は、どのように学生代表を参画させているのか」『名古屋高等教育研究』23, 245-260頁.
- 中里祐紀 (2013) 「学生とFDの理想的な関係を模索する：より多くの学生がFDを楽しむために」清水亮・橋本勝編著『学生と楽しむ大学教育』ナカニシヤ出版, 294-311頁.
- 中里祐紀 (2022) 「学生参画型FDの有効性と継続性―岡山大学を事例として―」『大学教育学会誌』44(1), 140-149頁.
- 中里祐紀 (2024) 「日本の大学教育における学生参画の変遷と課題」『比較教育学研究』69,91-109頁.
- 日本高等教育評価機構 (2024) 「欧州における高等教育の質保証へのステークホルダー（特に学生）参画に関する調査研究」『認証評価に関する調査研究』12, 47-117頁.
- 橋本勝 (2002a) 「誰にとってのFDか―岡山大学学生・教員FD検討会がめざすもの―」三尾忠男・吉田文編『FD（ファカルティ・ディベロップメント）が大学教育を変える』文葉社, 120-126頁.
- 橋本勝 (2002b) 「FDと学生力：岡山大学 学生・教員FD検討会の1年」『京都大学高等教育研究』8, 179-187頁.
- 橋本勝 (2006) 「学生参画型の教育改革～学びの主権者としての学生のパワー～」山形大学教育方法等改善委員会編『教養教育授業改善の研究と実践：山形大学教養教育改善充実特別事業報告書平成18年度』3-26頁.
- 橋本勝 (2015) 「学生参画型FDのあり方～その発展経緯と意義～」平成27年度全国大学教育研究センター等協議会資料.
- 服部憲児 (2012) 「学生参加型FDの現状と実践上の課題」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』38, 197-213頁.
- 林義樹 (1994) 『学生参画授業論―一人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法―』学文社.
- 林義樹 (2002) 『参画教育と参画理論―一人間らしい『まなび』と『くらし』の探究』学文社.
- 林義樹編著 (2015) 『ラベルワークで進める参画型教育―学び手の発想を活かすアクティブ・ラーニングの理論・方法・実践』ナカニシヤ出版.
- 福留東土 (2024) 「趣旨説明：特集 大学教育への学生参画の国際比較」『比較教育学研究』69, 2

- 4 頁.

- 前田裕介 (2015) 「学生参加型FDに関する学生の意識」『大学教育学会誌』 37 (2), 162-169頁.
- 文部省高等教育局 (2000) 『大学における学生生活の充実方策について (報告) —学生の立場に立った大学づくりを目指して—』 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm) (2024年11月29日アクセス).
- 安田淳一郎・近田政博 (2009) 「教育改善活動に参加する学生の意識変化—名大物理学教室における学生教育委員会の事例—」『名古屋高等教育研究』 9, 113-132頁.
- 吉田博 (2013) 「学生が参画する教育改善・学生支援活動の効果検証に関する一考察—徳島大学学生チーム「繋ぎcreate」の事例から—」『大学教育研究ジャーナル』 10, 9-20頁.
- 和賀崇 (2014) 「学生発案型授業「Let's Cooking! 地域の人と自炊力を鍛えよう!!」の成果と課題」『大学教育研究紀要』 10, 151-160頁.
- 渡邊あや (2024) 「フィンランドにおける大学教育への学生参画—学生の位置づけの変化を中心に—」『比較教育学研究』 69, 25-41頁.
- Bindra, G., Easwaran, K., Firasta, L., Hirsch, M., Kapoor, A., Sosnowski, A., Stec-Marksman, T., Vatansever, G. (2018) Increasing representation and equity in students as partners initiatives. *International Journal for Students as Partners*, 2 (2), 10-15.
- Matthews, K. E. (2017) Five propositions for genuine students as partners practice. *International Journal for Students as Partners*, 1 (2), 1-9.

General Student Participation in Student-Engaged Instructional Improvement Initiatives in Japanese Universities: Student-Engaged Faculty Development

Yuki NAKAZATO

Abstract

Based on student-engaged faculty development (FD), this case study examines the participation of general students, beyond voluntary student members, in student-engaged instructional improvement initiatives. Although the role of general students has often been undervalued, no studies have directly explored their involvement, leaving this aspect insufficiently examined. The current study focuses on the student-engaged FD organization at Okayama University, which has a system where both voluntary and general students are selected as student committee members. Semi-structured interviews clarify the actual participation of general students and its effects. The opinions of participating general students are confirmed to play a crucial role in the organization's activities and management. While voluntary and general students follow different growth trajectories, their coexistence enables them to learn from each other's perspectives, acquire diverse skills, and, in some cases, influence their future career paths. Based on the findings, no compelling reason exists to exclude general students from student engagement. Moving forward, to ensure opportunities for a diverse range of students, including the general population, to participate is essential.

